

30. 慢性腎臓病を合併しない健常高齢者における脈波伝播速度(baPWV)と

生命・機能予後との関連:住民健診における検討

宮野伊知郎¹⁾、西永正典²⁾、高田淳²⁾、安田誠史¹⁾、土居義典²⁾

1)高知大学医学部 予防医学・地域医療学(公衆衛生学)

2)高知大学医学部 老年病・循環器・神経内科学

1. 背景・目的

動脈壁硬化の亢進は予後悪化因子として知られている。一方、慢性腎臓病(CKD)も予後悪化因子であり、高齢者ではその合併率が高い。今回、健常高齢者における脈波伝播速度(baPWV)の意義を検討することを目的とし、CKDを合併しない自立高齢者におけるbaPWVと3年後の死亡およびADL悪化との関連を検討した。

2. 方法

対象者は、住民健診を受診した高知県K町在住の65歳以上の高齢者230人(平均年齢75歳、男性88人、女性142人)。基本的ADLは自立しており、心血管疾患の既往はなく、CKDの合併はない(改訂MDRD簡易式により求めた推算糸球体濾過量(GFR)が60ml/min/1.73m²未満かつ、新鮮尿による蛋白尿陰性)。3年間、予後およびADLを追跡調査した。

3. 結果

3年後の死亡者は17人、ADL悪化者は22人であった。

(1)baPWV 1865cm/sec以上において1865cm/sec未満より、死亡率の有意な増加を認めた(13% vs. 1.7%, p=0.002)。多重ロジスティック回帰を用いた検討において、baPWV 1865cm/sec以上は死亡と有意な関連を認めた(O.R.=7.1, 95%C.I.=1.5-33.9, p=0.014、調整因子:年齢、性、高血圧治療の有無)。

(2)3年後の生存者におけるADL悪化者の割合は、baPWV 1865cm/sec以上において1865cm/sec未満より高値であった(19% vs. 2.7%, p=0.001)。多重ロジスティック回帰を用いた検討において、baPWV 1865cm/sec以上はADL悪化と有意な関連を認めた(O.R.=6.5, 95%C.I.=1.8-23.6, p=0.004、調整因子:年齢、性、高血圧治療の有無)。

4. まとめ

地域在住のCKDを合併しない自立高齢者において、baPWV高値は生命予後悪化および機能予後悪化の独立した予知因子であり、baPWV測定は健常高齢者の予後予測において有用な検査であることが示唆された。